

バシュユラール『瞬間の直観』の諸問題(2)

及川 馥

まえがき

本論は「バシュユラール『瞬間の直観』の諸問題(1)」(茨城大学人文学部紀要(人文学科論集)第二十二号、平成元年三月)の続篇である。前回は『瞬間の直観』第一章第三節まで扱ったので、今回は同書の第一章「瞬間」の第四節から第二章「習慣の問題と不連続的時間」の第一節まで、原書五一ページから八九ページまでを扱う。なお使用テキストは前回ど
うの Stock 版(1932)である。

IV

バシュユラールはベルクソンの持続とループネルの瞬間の折衷を断念し、今度は瞬間の立場から、一般的に持続とみなされている事象を徹底的に再検討することによって、瞬間概念の正当性を証明しようと試みる。

まず前節までのバシュユラールの主張に対し予想される反論が次のように設定される。

「ひとは、われわれをもっと上手に論破するため、必要とあれば出来事は瞬間的に発生し、必要とあればそれらの出来事が瞬間的であることにさえ同意するであろう。しかし、それらの諸瞬間を区別するためには、ひとつの間隔アンテルヴァルが現実に実在性をもつのだと主張するだろう。この間隔がつまり本当の時間であり、空虚な時間、出来事のない時間、持続する時間、自己を延長しまた自己を計測している持続であると、われわれにいわせたいのである」(p.51)。

ここでバシュールはきわめて明快な反論の方法を示す。それは、瞬間と瞬間をへだてる空無としてのこの間隙に、瞬間を瞬間たらしめる尺度を適用してみることである。

「時間は、もしそこで何ごともし生起しないならば、時間は何ものでもないし、クレアション天地創造に先立つ^{エテルニテ}永遠など意味がなく、無は測定されることができないかもしれない、とわれわれはあくまで主張することにしよう」(p.51)。

時間とは何ごとか生起する時間であるとバシュールはいうのであるが、瞬間と瞬間の間隙の無と、創造以前の無と同一視できるものであろうか。また出来事の生起する時間はつねに瞬間なのであろうか。このような疑問が当然生じるであろう。

一般的な算術的な時間の概念、ひとびとが時計によって計測する時間の感覚からつくりあげる時間概念をバシュールはまったく否定するのであろうか。時間の尺度を受け入れることは、当然その持続性を受け入れることになるのではあるまいか。だから算術的時間の立場からは次のようなバシュールへの批判が生じるであろう。

「あなた〔バシュール〕の命題のなかでは、割切れる部分に時間を分割することも、また時間の計測〔尺度〕も受け入れることはできないはずだ。ところが、あなたは一般のひとと同じように、一時間が六〇分続き、一分は六〇秒続くという。したがってあなたは持続を信じているのだ。〔一方〕あなたは、持続するもの、過ぎ去るもの、ひとが待つものを喚起するあらゆる副詞、あらゆる単語を使用せずには話すことはできない。あなたの議論のなかで、あなたは長い間

longtempsとか、その間 pendantとか、引き続いて durantとかということばを語らないわけにはいかない。持続は文法のなかにも、語形態のなかにも文章中にも存在するではないか」(p.52)。

算術的反論から、ことばの意味や文章の中にある持続にまで話は飛躍しているが、ことばの問題は「具体的なものから抽象性を抽出し、事物から思考が解放されるようにするため、語の意味を十分に變形することが哲学者の役割である」

(p.52-53)というふうに考えれば、「言語表現レベルでの循環法」(p.53)からは離脱できるとバシュラールはいう。

しかし持続の支持者にとって最初のよりどころとなる計測の問題は、もっとも素朴な問いだけにどうしても解決しておかねばならない。

「持続が計測されるのは、持続が大きさをもつからである。持続はしたがってその実在性のあきらかなしをもつ」(p.53)。

これがバシュラールの設定した反対派の持続説の根拠である。いったいこのしるし *signe* がほんとうに直接的「無媒介」であるかどうかを考えれば、ループネルの直観的な理論のなかで、持続をどう評価するのかが分るはずだとバシュラールはいう。

「いったい時間に連続性の外観をあたえるものは何であろうか。われわれは自分の欲するところに切断をおこなうと、任意に指定されたその瞬間を例示するひとつの現象を指示できる、らしい、という事実である。このようにしておそらくわれわれの認識の行為は十分に自由な認識活動にゆだねられているということに、われわれは自信がもてるのだろう。換言すればわれわれはどんなときにも、*n'importe quel moment* われわれの行為の有効性を試すことができる、から、われわれの自由な諸行為を連続した線の上に置けるのだと主張するのである」(p.53-54)。

だがこのことは角度を変えていえば、ほとんど同義語的表現によって「われわれは自分の欲するときはそのたびごと

に *toutes les fois que nous voulons* われわれの行為の有効性を試すことができる」(p.54)となるであろう。

つまり前者の表現は「われわれの存在の連続性を暗黙のうちに仮定しており、自明のものとして仮定されたこの連続性を、われわれは持続の説明に移し替えているのではないだろうか。しかし、それではわれわれ自身に属するとされる連続性についてどんな保証をわれわれはもつのであろうか。このような検討がそのつど成功するためには、支離滅裂なわれわれの存在のリズムが宇宙のひとつのリズムに対応しているとでもいうほかならう。あるいはもっと簡単にいえば、われわれの切断の恣意性を証明するには、内的な行動の機会オカシヨが宇宙の機会に対応する、要するに、空間—時間—意識の一点の上で偶然の一致がひとつ明確になるとでもいうほかあるまい。そうなるとわれわれの重要な論点もここにあるのだが、非連続的時間の命題のなかでは、 $\wedge \dots$ するときはそのつど \vee *toutes les fois* という表現は連続的時間の命題のなかで捉えられた \wedge つねに *toujours* \vee という語と正確な同義語として示されることになる。このような翻訳をわれわれに許してくれるなら、この鍵を使うことによって連続という語のすべての内容がわれわれに引渡されることになる」(p.54—55)。

つまり計測のために区切りをつけ時間を切断しても、瞬間がそのつど対応するのであれば、持続の堅固な連続性もあえなく瞬間の不連続な連続におきかえられてしまうというのが、瞬間の多数性にもとづくパシユラルの反批判である。しかもパシユラルは、連続の別の原因を次のように示すのである。

「それぞれどこか、生は数えきれないほどおびただしい多くの瞬間をわれわれの手のとどくところに置くが、われわれがする計算にくらべてみれば、瞬間は無限であると思われるほどである。もっとももっと多くの瞬間をわれわれは消費しうることに気がつく。そこから「瞬間を」数えたりしなくともわれわれは消費しうるのだという確信が生じる。そこに内密な連続性の印象が根ざしているのである」(p.55)。

持続説の根拠にある持続の印象は、よく見れば瞬間の連続なのではないかとバシュラールは主張するのである。

したがってバシュラールは、瞬間の一致ということを表わす「共存コンコマンクス」という考え、また共時性サシクロニスムという平行関係を示す概念によって、ベルクソンの持続とループネルの非連続性を説明することになるのである。

持続説の立場からすると、「二つの現象は、もしつねに一致しているなら、共時的である。生成と作用アクションの調整が問題である」(p.55)。

他方、ループネル派からいえば、「二つの現象は、もし第一現象が現前するつど第二の現象が同じように現前するなら、共時的である。反復と行動アクトの調整が問題である」(p.55)。

どちらの表現が慎重であろうか。

「ベルクソン氏とともに、共時性は二つの平行的展開に対応するといえ、客観的証明をいささか逸脱することになるし、検証の領域を広げてしまうことになる。われわれはつねに自分の経験の非連続に直面することしかないのだから、連続それ自体を肯定するこの形而上学的外挿法は拒否する。したがって共時性は、いつでも効果的諸瞬間に対応した数え方のなかにあられるものであり、ひとつの連続した持続の、いうなれば幾何学的な尺度としてあらわれることは決してないのである」(p.55-56)。

持続と瞬間の関係をもつと物理的に考えてみよう。というのは好むと好まざるとにかかわらず、技術は時間を細分化する方法を次々にあみだしてきたからである。超高速度映画のように「一万分の一秒の単位で生成を(分割して)描く」(p.56)ことも可能である。

こういう場合には、肉眼で見て連続的な持続を今度は「細部の検討のため、選ばれた単位をつねにより小さな分数として持続を見積る」(p.56-57)という事態にいたっている。

しかし、あくまで瞬間の立場に立って、時間の構造を考えれば、「時間は連続の細分化という図式にしたがって分割されるのではなく、むしろ数値の対応関係の図式にしたがって増加することが分かるであろう」(p.55)とバシュラールはいう。

ここでクーチュラ Couturat (Louis, 1868-1914. フランスの哲学者、数学者)の分数の理論をひきあいに出し、「分数とは二つの整数の集合であり、本当は分母が分子を分割することはない」ということを確かめたのち、時間の連続説の方は、「分析の必要から、同質で連続的な量としての——またとくに直接あたえられた量としての——分子を出発点とし、任意の検討にこうしてゆだねられる分母、しかも検討が精密になるにつれてこの任意「数」が大きくなる分母によってこの \wedge 所与(データ) \vee を分割する。われわれの反対者は、無限小的分析をさらにすすめれば、持続を \wedge 解体崩壊 \vee させてしまう恐れすらある」(p.55)とバシュラールはいう。

一方、瞬間の側からすれば、「比較の基礎である現象の瞬間の多数さのしるしである分母を出発点とする。それは当然もつとも精密に知られる」(p.57-58)。

(そうすると、計測すべき現象より、計測の装置の方が精密さに乏しいことは、おかしいのではないか、とバシュラールはいう。)この分母の上におくべき分子は何であろう。「精密に区切られたこの現象に、もつと緩慢な現象の実現が何度対応するかを考えてみよう。すると結局、うまくいった共時性^{サンクロニスム}の結果がこの分数の分子をあたえる」(p.58)ことが分る。

「このように構成された二つの分数は同じ価値をもつこともありうる。しかし同じ仕方で構成されてはいない」(p.58)。この場合、共時性の結果をかぞえるときに「……する間^{バシダン}」という語をこっそり使うことはなかったか、という反論について、バシュラールは次のようにいう。

「もしひとが、瞬間の豊富な現象から瞬間の少ない現象へ——つまり分母から分子へ、そしてその逆ではなく——移

りながら考えを深めてみれば、そのひとは、たんにことばの上の成功にすぎない持続の観念をひきおこす用語だけでなく、持続という観念そのものも用いずじまつことに気づくであろう。そしてそのことは、かつて持続が主人公として君臨したこの領土において、持続は召使いとして利用されるにすぎないのだということをはっきり立証している」(p. 81-83)。

次に、こういう立論を支える図式的証明をバシュラールは用意する。それは二系列の点線である。

一方の肉眼的現象はひとつの点がひとつの持続をあらわしているとする。バシュラールは実際に黒い点を一列に並べる。これを現象1としよう。

「間隔を問題にしないでこれらの点を配置する。われわれにとって持続がその意味、あるいはその図式をもつのは間隔ではなく、また連続した間隔とはわれわれにとっては無^{ネチン}のことであり、そして無はいうまでもなく持続もへ長さももたないからである」(p. 59)。

他方の精密に区切られた現象は、第一の点線の点一個に対し三個が対応するように図示される。これを現象2としよう。さて、この場合連続説からすれば現象1が一度おこる「間に」現象2は三度おこるといえる。

「その場合」両系列を支配するひとつの持続、つまりこのへの間Vという語がその意味をもつ持続にひとびとはうったえるであろう。またこの持続は、分、時、日というようにだんだん大きくなる領域のなかで明らかにされる」(p. 60)。「逆に非連続性の絶対的信奉者のやり方で(2)から(1)への共時性を読むなら、ちょうど対応する肉眼的現象は数多く出現する現象(現実の時間にもっとも近い現象であるが)に三、対一、の割合で対応するといえるであろう」(p. 60)。

「この二通りの読み方は根本においては等価であるが、前者はいささか比喩的であり、後者がもともとのテクストにより近い」(p. 60)という評価をバシュラールは下している。いささか譲歩的な彼の態度が気になるが、持続はへ実体Vのように、本来価値をそのなかに無制限にのみこむだけに、瞬間の尖锐な意識だけが時間の本質を生かすことを別のか

たちで示さねばならない。

パシユラールは音楽の比喩をつかつてもう一度その考えを示す。

「世界というオーケストラのなかには、しばしば沈黙している楽器がいくつもある。しかし演奏している楽器はつねにひとつだといつてしまつては間違ひである。世界は諸瞬間のテンポにしたがう音楽的拍子にのっとり規制されている。もし現実の全瞬間を聴くことができれば、八分音符は二分音符の断片でできているのではなく、二分音符が八分音符をくりかえすのだということを理解するだろう」(G. G.)と音楽の例をだし、「この反復から連続という印象が生じる」(G. G.)のだということを力説する。

「したがつて、瞬間における相対的多数さが時間のいわば相対的尺度を準備することが分る。人間の時間的な富を正確に計算し、われわれ自身のなかで反復するすべてのものを総和として測定するためには、時間のすべての瞬間を本当に生きることが必要であろう。ひとが非連続的時間の眞の展開を獲得するのはこの全体的な経験においてである。そして空虚な持続、つまり純粋な持続の印象をまたもつとすれば、反復が単調だからである。瞬間の総体との数的な比較の上に立つてみれば、個々の生や個々の現象のもつ時間的な豊かさの概念は、時間の豊かさが利用されるその手段により、あるいはむしろ、時間の豊かさの実現に失敗する手段により、ひとつの絶対的な意味をもつであろう。しかしこのような絶対的土台は人間には認められていない。われわれは相対的なバランスシートで満足しなければならない」(G. G. 161)。

しかし理想的な観念的な立場から現実の立場、すなわち相対的立場に移行しても、持続が瞬間の代りに存在することにはならない。

より具体的な感情面での持続を考えよう。

「持続の情動的特色、あるいは存在の喜びや悲しみをつくるものは、思考の時間としてあるいは共感の時間として利用された生の時間の均衡あるいは不均衡である」(p.62)。

このあまりに概括的な表現をもとにもどせば、楽しい情動は、共感の時間として利用された人生の時間と均衡していると読むべきなのだろう。もちろんこれはシロエの岸边、「精神と心が相互に補完しあって、和解している」(p.63)とこゝでのまだまだ理想的V情況である。だがもっとよく見よう。

「物質は存在をおろそかにし、生は生きることをおざりにし、心は愛することを無視する。ひとは眠っているうちに楽園を失なう。まず人間の怠情を展望してみよう。原子は放射しそしてしばしば実在し、きわめて多くの瞬間を利用するがあらゆる瞬間を利用することはない。生きた細胞はすでにその努力を一層出し惜しみし、細胞を構成する原子全体が細胞にゆだねている時間的可能性の一部分しか利用しない。思考については、それが生を利用するのは、不規則なひらめきによる。この三つの濾過体を通して、ほんの僅かの瞬間が意識に達するのだ」(p.63)。

このように利用された瞬間の意識がまことに僅小なことに驚ろかざるをえない。

「そこで失われた瞬間を求めて行こうとすると、われわれは鈍い苦痛を感じる。復活祭の無数の鐘の音に記されたあの豊かな時間をわれわれは思い出す。あの復活の鐘のひとつきひとつきが、すべて数えられており、ひとつひとつが目覚めたわれわれのたましいにこだまするゆえに、個々には数えられないのである」(p.63)。

一個の鐘の音が次の音とはっきり区別されていて、それぞれの瞬間を区切りながら、いくつ鳴り響いたかもはや数えあげることができない状況で、瞬間は時間の豊かさを示すのである。「目ざめたたましいにこだまする」ことが、豊かさのしるしなのであり、ここでひとつの主観的な事件が生じたことを示している。耳をすまして鐘の音に一体化する瞬間には、その音を数量化する知覚や意識は消えなければならず、むしろ豊かさのためにこうした表層の客観的な意識は

障害となるのではあるまいか。

「そして生全体のこれらの時間に対し、相対的に貧弱なために知的には緩慢な時間、空虚なために——カーライルがその悲しみのどん底でいったように、計画の空虚さ——のために死んでいる時間、何ものもあたえないゆえに際限なく敵意をもつ時間を対比させるとき、喜びのこの思い出はすでに悔恨になっているのである」(p. 63)。

もう一度理想的な時間を考えてみよう。

「すべてがあたえられる聖なる時間を夢みよう。それは^{プレッシャー}充滿した時間ではなく、^{コンプレット}完璧な時間である。(つまり)時間のあらゆる瞬間が物質によって利用され、物質のなかで現実化された全瞬間が生によって利用され、生きた全瞬間が感じられ、愛され、思考される時間である。その結果、意識が完全な時間の正確な尺度なるがゆえに、意識の相対性が消去されている時間である」(p. 63)。

時間の意識は瞬間の意識であり、それが完全に機能すれば、まさに意識は瞬間によって時間を測定するクロノメーターになる。しかし、そのとき愛することも感じることも意識はしないのであろうか。意識は瞬間を意識しつつ愛しまた感じるものであろうか。絶対的な意識、つまり相対性を消去した意識のあり方が示唆的である。

「結局、客観的時間とは、^{マキシム}極限の時間である。それはあらゆる瞬間をふくむ時間である。造物主の諸行為の凝縮した集合によって作られたものである」(p. 63)。

逆にいえば人間の時間とは、主観的な時間であり、断片的時間であり、あらゆる瞬間をふくむことのできない時間となるのであろうか。

第四節の要約はこうなる。

まず空虚な時間、出来事のない時間は無である。瞬間と他の時間の間隙も無であり、天地創造以前の永遠はまったく

意味がない。

時間の測定は連続性の外観にもとづくが、これを瞬間の不連続な連続であるということができ、持続をすべて説明することが可能である。任意の切断をおこなうとき、そこに持続が前提されなくとも、瞬間の出現があれば、それは可能である。したがって「…するときはつねに」という持続的時間を「…するときはそのつど」という不連続的時間で示すことができる。

ベルクソンからすれば、二つの現象がつねに合致するなら、それは共時的である。

ループネルにいわせれば、第一の現象が現前し、そのつど第二の現象が現前すれば、両者は共時的である。

時間の算術的分割を高速度映画のようにおこなっても持続の証明にはならない。持続を出発点にして細分化して検討するなら、時間は一層小さな分数になってしまう。瞬間から出発すれば、この場合でも分割されず、数値の対応関係にとどまる。

クীチュラの分数の考えによってみる。

ベルクソンは分子が直接所与であり現象であり、計測される時間を分母とするが、分母を精密にすればするほど数値は増大する。したがって分析が進めば分数としての持続は消えてしまう。

ループネルでは、分母が瞬間。分子は瞬間に対応する現象の共時性の結果。

瞬間の多い現象から瞬間の少ない現象へ、つまり分母から分子へと移りながら思索すれば持続をもちいず説明可能。

次の二通りの読み方は等価である。

Aが一度おこる間にBが三度おこる（連続説）

Aが一度に対しBが三度対応する（非連続説）

またオーケストラでも2分音符の断片で8分音符がつくられるのではなく、8分音符の反復から2分音符がつくられる。そこから連続という印象が生じる。純粹持続とは単調な反復ではないか。持続が広がりをもち、豊かであるというのは幻影である。

原子はしばしば放射するとき実在する。多くの瞬間を使用するが、すべての瞬間ではない。細胞はその努力を出しおし、可能性の一部しか使用しない。思考は「生を使用するのは不規則な閃光による」。瞬間はこの三つのフィルターによってわずかに意識に達するのである。大半は失われた瞬間である。

バシュラールにいわせれば、「完璧な時間」とはすべての瞬間が物質によって利用されている時間。物質中に実現された全瞬間も生によって利用される時間である。理想的にいえば、生きた瞬間がすべて感じられ、愛され、思考される時間である。この結果、意識とは完全な時間の正確な尺度となる。したがって意識の相対性は消失する。客観的時間——極限の時間——全瞬間をふくむ時間——は造物主の行為の凝縮した集合である。これは人間の現実の不完全な時間意識の対極にある。

V

次に残された問題は持続のベクトルの性格の検討である。

バシュラールによれば、過去とか未来とかは本質的には持続同様、間接的な印象にもとづくもので、時間の本質にはふれない無であり空虚である。

「瞬間は持続を内部に保持していない。それはあるひとつの方向にも、他の方向にも力をすすめない。瞬間は二つの

面をもたないし、それは全体であり唯一である」(p.64-65)。

ここから瞬間の新しい性質があらわれる。

「現在には過ぎてい^{パッセ}かない。なぜなら、別の瞬間を見つげるためでなければひとつの瞬間を離れられないからである。

意識は瞬間の意識であり、また瞬間の意識は意識である。それほど接近した二つの表現はも^{レシフロック}っとも近い换位命題のなかにわれわれを置き、そして純粹意識と時間的現実の同化を主張する。ひとたび孤独な冥想において捉えられた意識は孤立した瞬間の不動性をもつのである」(p.65)。

現在にある瞬間は過ぎてい^{パッセ}かない。という驚ろくべきことをバシユラルはいう。それは瞬間の意識と意識の瞬間が同化し一体となるからである。そこで純粹意識と純粹な時間意識とが合すると、現在の瞬間しか意識されない。時間は過ぎてい^{パッセ}かないことになる。他方、移動するものの意識は変化の意識であり、つまり別の瞬間の意識ということになる。時間の意識は瞬間にしかはたらかず、その意識は反省的意識、あるいは瞬間の意識を意識する意識ではないと考えるべきなのである。意識がはたらきながら、瞬間はそのまま深くなる、と詩的な表現を他のところでバシユラルは使用するであろう(『詩的瞬間と形而上学的瞬間』)。この瞬間の不動性は、緊張した力のみなきった点の持続性なのであり、他の一切から切り離された高度の燃焼をおこなう瞬間だともいえよう。

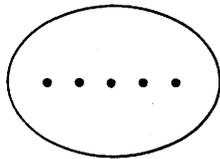
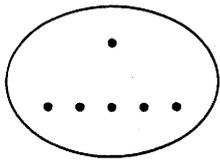
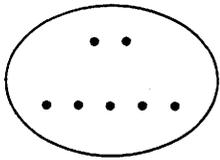
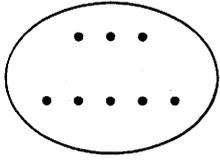
「瞬間の孤立化の状態で捉えられることによって時間は乏しいけれど純粹な同質性^{オモジエネチ}を受けることができ。まずこの瞬間の同質性は瞬間のさまざまの群の結果である異方性^{アンソトロー}に対し何も証明しない。ベルクソン氏によってあれほど強調された持続の個別性の再発見を許すのはこれらの瞬間の群である。換言すれば、瞬間そのもののなかには、われわれに持続の要請を許すものは何もない。というのも過去や未来とよばれるものについて、われわれの経験が、たとえ現実的であっても、それを直接説明しうるものが何もないのであるから、ただたんに過去と未来を指し示すだけの諸瞬間の

展望を構成しようとする努力しなければならないのである」(p. 65-66)。

過去や未来というような異なる異方性を生じさせるのは瞬間の集合した結果なのである。瞬間それ自体は過去でも未来でもなくひたすら現在なのであるが、いくつかの瞬間の集合グレイマンが未来や過去を形成するのだとバシュラールはいうのである。しかし瞬間には過去や未来を直接根拠づけるものは何もない。もちろん瞬間のなかには持続もない。(瞬間が移行かないということこそ持続に対する本質的な異質性なのであり、瞬間には流動がないことに、あるいは瞬間の不動性に注意しなければならない。)しかし現実には過去や未来という時間的存在を何とかして位置づけなければ、瞬間説による時間体系が破綻をきたすであろう。

瞬間の集合によって生じる異方性をどう説明すればよいのか。バシュラールはまた音楽の例によって過去というものの特性を考える。

「諸瞬間よりなる交響曲を聞くことによって、ひとびとはそのなかに死につつある楽句、倒れた楽句、過去の方に送られる楽句を感じとる。しかしこのような過去への逃避は、二義的な外観であるという事実によって、まったく相対的なものである。ひとつのリズムは連続している交響曲の別の譜面と相対的なかたちで消える。この相対的凋落は次の図式によってかなりうまく表わされる。



五対三が五対二になり、ついで五対一となり、さらに周囲で世界が反響し続けても、ひとつの存在の沈黙がひとつとから離れるのである。」(p.66)

オーケストラのなかで次第に消えるリズムは過去に移行したといえるであろう。消えたあとに残る無音シランヌは他の継続しているリズムとの関連で不在を響かせるであろう。換言すればそれは今の瞬間との関連で消えたといえるのであり、それはあくまでも相対的なかたちでしか捉えられない。

逆に未来は今鳴り響く音が期待させる次の音というポテンシャルなかたちで捉えられよう。

バシユラールはこの図式から、時間のポテンシャルなものを引きだす意図があるのだ。

「境界を確定することもなく現在の時間と呼んでいるものなかに可能的ポテンヤルであると同時に相対的でもあるものをひとは理解する。変化することもなく連続するリズムとは、ひとつの持続をもつ現在である。この持続する現在は、ある特殊な視点から見れば完全な単調さによって安定されている多数の瞬間からなっている。個々の人間の個性を決定する持続的な感情がつけられるのは、このような単調さによってである。その上、きわめて多様な状況のただなかで〔瞬間群の〕統一化がなりたつこともありうる。愛することを続けているひとにとって死せる愛(人)は現在であると同時に過去である。変らない心にとってその愛は現在であり、不幸な心にとってその愛は過去である。苦しみと思ひ出を両方とも受け入れる心にとって、その愛は苦しみと同時に慰めである。次のように述べても結局は同じことになる。持続するたましいのしるしである永遠の愛は、苦しみや幸福とは別のものであり、感情の矛盾をのりこえることにより、持続する感情は形而上学的な意味を捉える。愛するたましいは規則正しく反復される瞬間の連帯性を本当に経験する。逆に、瞬間の画一のリズムは其感のアプリオリなひとつの形式である」(p.66-67)。

次に恋するひとの永遠の愛も、それを現在とも過去ともみることができ。同一人物の心のなかで、死せる愛人への愛

が生きているこの瞬間に、それは現在の愛であり、今の瞬間に死者を愛惜するとすれば、その愛は過去のものとなる。引き続いて高鳴っている愛はしたがって、瞬間にどうあらわれるかということで過去にも現在にもなると考えねばならず、この永遠の愛は現在の苦しみや幸福とは次元の異なる形而上学的なものだとバシュラールはいう。そうするとこの新しい持続は今まで反論してきたベルクソンの持続とはどんな点で異質なのだろうか。「規則正しく反復される瞬間の連帯性」と不連続性はもはやなく、規則正しい反復はかぎりなく持続に接近するのではないだろうか。永遠の愛というエネルギーは不連続性を連続性に変化させ、瞬間を永遠に連続させ連帯させるものであろうか。

「第一の図式と逆の図式があれば、新しく生れるリズムを示し、その進展にかかわる拍子の要素をあたえるであろう。音楽的な耳はメロディのなり行きを聞き、始まった楽句がどのように完成するかを理解する。星の軌道の将来を予測するように音の未来も前もって聞きたる。われわれは直接の未来の方にあらゆる力をふりしぼって身をのりだす。われわれの目下の持続をつくるのはこの緊張、精神集中だけである。ギュイヨーがいったように、われわれ自身が投射の中心であるようなパースペクティブとして未来を真に支配するのはわれわれの意インテンション図である。△未来を創造するためには、欲しなければならぬ、欲求しなければならぬ、手をのびし前進しなければならぬ。未来はわれわれの方にやってくるものではなく、われわれが向って行くところのものである。√(ギュイヨー『時間の観念の生成』)。未来の方向と射程距離は現在そのものなかに登録されている」(p.67-68)。

過去に対し未来はさらに意欲の緊張を要求する。いまここという瞬間に意図を付加し、そこにいわば四次元的な点を作るのである。(「奇想と細密画としての世界」、『エチュード』邦訳、五九ページ以下)という「掘り下げ」と同じような力やエネルギーをパースペクティブに加味することによって、未来は創造されることになるのだろうか。

しかしこの未来も過去も習慣にすぎないとバシュラールはいう。いずれも「第一の観点の特質」とはいえないのであ

り、瞬間の現実によって再構築しうるものである。

「一見反対のような次の二つの結論を両立させるようにしなければならない。

第一。持続は直接の力をもたない。現実の時間は孤立した瞬間によってしか本当は実在しない。現実のものなか、行為のなか、現在のなかに完全に全体が存在する。

第二。しかし存在は諸瞬間の諸リズムにとって反響の場である。そしてこのようなものであれば、こだまにはひとつの声があるといわれるように、存在はひとつの過去をもつといえるのかもしれない。しかしこの過去は現在の習慣にすぎないし、また過去の現在の状態とはいぜんとしてひとつの比喩なのである。実際、われわれにとって、この習慣は物質にも空間にも登録されてはいない。本質的な習慣しか関係しえないのである。われわれからみれば、思考であるこの習慣は登録されるにはあまりに軽やかであり、物質中に眠るためにはあまりに非物質的である。この習慣は連続するひとつの演奏であり、再開されるべきひとつの楽句である、というのはそれがひとつの役割を演ずる交響曲の一部をなしているからである。少くともこの手段によって習慣的にわれわれは過去と未来を連続させようとするのである」(p. 69)。

ここで習慣という第二章での主題が導入され、過去も未来も習慣であるという考え方が示される。いつものようにバシュラールは一つの章の終りに次章のテーマを導入して、論文全体を有機的に構成しようとしているのである。

しかも過去の現在の状態とはあくまでも比喩にすぎないし、実在ではなく、現在の習慣的な形式にすぎないとバシュラールは考える。過去の瞬間の在り方を習慣によって理解し受けとめているにすぎないというのである。

「当然ながら、未来の側ではリズムは確実さが乏しい。昨日と明日という二つの虚無のあいだでは左右対称ではない。未来は序曲でしかなく、前進ししてみずからを試みているひとつの楽句にすぎない。それはただひとつの楽句である。世界はごく短い準備によってしか延長されない。演奏中の交響曲においては、未来はいくつかのテンポによってのみ保

証されている」(p.69)。

「人間にとって過去と未来の非対称性は根本的なものである。われわれのなかで過去とはこだまを発見した声のことである。こうしてもはやひとつの形式にすぎないものにひとつの力をあたえるのであり、さらには多数の形式に対し単一の形式をあたえるのである。この総合によってそのとき過去は実在の重さをもつのである。

しかし、未来は、われわれの欲求がいかに強くとも、奥行きのない展望にすぎない。未来は現実に対し本当はいかなる堅固な結びつきももたない。だからわれわれは未来は神のみぞ知るといっているのである」(p.70)。

過去と未来の非対称性は、いわば瞬間の非連続性の空間化した考え方であろう。未来は「奥行きのない展望にすぎない」ということは現在の瞬間に眼前にある行動の空間は奥行きをもち、さらには力を加えて「掘り下げ」すら可能であるのに、未来の空間はまだ二次元的なものにすぎないといっているのであろうか。

「もしループネルの哲学の第二主題を要約するとすれば、以上のことはおそらく説明されるであろう。われわれは習慣について論じたのである。ループネル氏は習慣を第一に研究している。われわれが検討の順序を逆にしたのは、過去の实在を絶対に否定することは恐るべき要請であり、よく判断を下すためには、習慣についての通常の観念とそれを同一視することで生じる困難を認めなければならぬからである。要するに、次の章では習慣についての普通おこなわれている心理学と、過去に対し現在の瞬間の直接的で無媒介のはたらきを否定する主張とをどのように両立させるか、ということを問うのである」(p.70)。

ループネルは習慣を第一章で論じていたのに、バシュラールはその順番を変更して、まず瞬間を論じたことの弁明をしている。それはわれわれ読者にとっても理解しやすい順序であるとすべきであろう。

さて第五節のレジュメをおこう。存在の根拠を瞬間のなかにもたない過去や未来をどのようにして位置づけるか。

現在の瞬間は移り過ぎない。別の瞬間を見つけないかぎり意識は移行しない。意識は瞬間の意識であり、純粹意識と時間意識は同化する。

瞬間は等質であるが、瞬間の集合は異方性をもつ。しかし瞬間自体に過去や未来の方向を求めることはできない。

オーケストラの音の交替を例として、現在の瞬間とは相対的なものやポテンシャルなものとして過去と未来を考える。一方、昔の愛に忠実な心のなかに、現在でありまた過去である愛がみられる。しかし永遠の愛は持続するたましいのしるしだが、現在の感情とレベルを異にする形而上学的意味をもつ。愛するたましいは瞬間の連帯性を共に体験することに留意すると、持続に接近する。

未来は、意識の集中が現在の持続を作りだす延長上にある。また意図が未来を支配する。現在の意欲が未来を作るのであり、未来の方向と射程は現在のなかに登録されている。

しかしこの未来も過去も現在の瞬間にくらべれば比喩にすぎず、これは習慣として説明されていることなのである。過去は物質や空間に登録されていない。こだまの声のような過去は相対的な音響上の習慣である。過去を未来に結ぶ機能をもつ習慣は非物質的であり、物質のなかに眠っているものではない。もちろんこの習慣はループネル独自の意味をもっている。

VI

パシュラールは瞬間の問題を当時の物理学的知識を駆使して考えている。

本節について筆者の言及する余地は少ないので、訳文を示すにとどめよう。

「しかしながら、以上のようなことがわれわれの目的であるなら、次章を始める前に、非連続的時間の直観を強化するための理由をいくつか現代科学の領域で探すこともできるのではあるまいか。ルーペネル氏も彼の主張と量子論の仮説中の放射現象についての現代的記述とをわざわざ対照している。実は、原子エネルギーのカウントは幾何学よりも算術を使っておこなわれる。このカウントは持続よりも頻度（振動数）によって説明され、△どれだけの回数▽という言葉が△どれだけの時間▽という言葉をおきかえている。

一方、ルーペネル氏が『シロエ』を執筆していたとき、一九二七年（ベルギーの）ソルヴェー研究所での学会で発表されたような時間の非連続性という主張が、どれだけ広がりをもちうるかをことごとく予見することはほとんどできなかった。また原子の統計についての現代の業績を読んでみれば、こういう統計の基本的要素を決定することに躊躇を感じることはよくわかるであろう。いったい何を数えればよいのだろうか。電子か、量子か、エネルギー群か。個別性の根本をどこに置けばよいのか。偶然によって動かされる要素を発見するために、時間の实在性そのものにまで溯及することは不合理なことではない。そこから、繁殖力豊かな諸瞬間の統計という構想が、瞬間をひとつひとつ孤立させて捉えることによって可能になるのである」（p.71-72）。

× × ×

「原子の積極的な存在^{エグジステンツ}の問題とつねに瞬間的な表出とのあいだで興味ある対比をやはりおこなうべきであろう。ある点からすれば、放射現象は、原子は変化する瞬間^{モメンツ}にしか存在しないということで、かなり良く説明されるかもしれない。この変化は突然おこることを付加すれば、実在するものはすべて瞬間の上に凝結することを認めざるをえなくなる。原子のエネルギーを数えるためには、速度を使うのではなく、力^{クラフト}積^{インテグラル}「インパルス」を使うことにすべきなのである」（p.72）。

「逆に出来事における瞬間の重要性を示すことによって、二つの瞬間をへだてる^{インテラヴァル}間隔^Δのいわゆる現実的性格

が、たえずくりかえされる反論の弱点であることを明らかにしうるのであろう。時間の統計的概念にとつて、二つの瞬間のあいだの間隔は蓋然性の間隔にすぎない。その無が延長されればされるほど、瞬間がその無に区切りをつけに生じる機会があることになる。空虚な持続、純粋な持続はその場合、機会の大きさしかもたない。原子は放射しなくなるや完全に潜在的なエネルギー的存在に移行する。原子はもはや何も消費せず、電子の速度はいかなるエネルギーも使わない。またこの潜在的状態では原子が長い休息のあとで解放しうる潜在力を節約することもない。原子はまったく打ち棄てられた玩具にはかならない。それどころか単純な可能性を構成するまったく形式的な遊戯ゲームの規則にすぎなくなる。存在は機会がくれば原子にもどされる。換言すれば、原子は繁殖力豊かな瞬間の贈与を受けるだろうが、原子は蓋然性の計算法則にしたがい、本質的な新しさとして、偶然にそれを受けとるであろう。なぜなら、おそかれ早かれ宇宙はそのあらゆる部分に時間の实在性の分け前をもつからであり、また可能なものは現実的なものがつねに最終的に受け入れられることになる誘惑なのだからである」(p.73)。

×××

「その上、偶然は絶対的必然性と結びつかないことを強制する。そのとき分るのは、本当は現実には作用しない時間が運命的な作用という錯覚をあたえうるといふことである。もし隣接する原子が放射したにもかかわらず、一個の原子が活動しないことが何度もあったとすれば、長い間眠っていて孤立したこの原子が活動する順番は次第に可能性が大きくなる。休息は作用の蓋然性を増大させるが、実際に作用を準備することはない。持続は原因というやり方で√(ベルクソン『意識に直接あたえるものについての試論』p.117)はたらくのではない。それは機会というやり方ではたらく。ここでもまた、因果性の原理は、持続する作用の幾何学的言語よりも、行為を数える言語でもって表現されるのである。」

(p.74)

「しかしこういう科学的証明はすべてこの本の問いの範囲外である。この証明を進めるには、今まで追求してきた目的から読者の目をそらすことになる。ここでは直観によって解放することしか実際には企てたくはない。連続の直観がしばしばわれわれを圧迫するので、それとは逆の直観によってものごとを解釈することがおそらく有益である。われわれの証明がどれほど力があるとひとが考えるにせよ、哲学と科学の基礎に別々の直観をふやしていくことの利益を見失うことはないだろう。ループネル氏の本を読むことにより、困難な直観を發展させながらえた直観の独立という教訓に大きな感銘を受けたのである。直観によって盲目になる危険をさけて直観をもちいることになるのは直観の弁証法による。不連続の時間という直観は、哲学的観点からとらえれば、物理科学のもっとも多彩な領域において不連続の命題へ入門しようとする読者を助けるであろう。不連続の形で考えることが一番困難なのは時間である。孤立した瞬間によって現実化されたこの時間の不連続性の考察は、不連続の教育学にもっとも直接的な道を開くであろう」(p. 76)。

このような蛇足的な一節を置いたのは、主として直観としてみた瞬間の考え方が、現代物理学においても原子の放射現象と原子の存在との関係のようにきわめて親近性をもつからである。私としてはこの節については解説すべき手段をもたない。

習慣に移る前に、現代物理学において瞬間の問題を捉えなおしてみる。

量子論の仮説の放射能の記述と対比。原子エネルギーのカウントには幾何学よりも算術をもちいることに注目(それは持続よりも頻度を、何秒というより何回という表現を用いる)。

原子の統計学は何を算えるのか。電子か、量子か、エネルギーか。個別の根拠が問題になる。つまり原子の具体的実在性がつねに瞬間化していることを指摘し、「原子は変化する瞬間にしか実在しない」という原理をひきだす。これで

放射能現象を十分説明できる。しかも変化は突然生じる。實在のすべてはこの瞬間に凝集する。(またエネルギーを算えるには速度ではなく力積をもちいる。)

一方、蓋然性の問題が残っている。原子は放射をやめると潜在的エネルギーになる。何も消費せず、エネルギーも電子の速度も使わない。それは見棄てられた玩具、形式的なゲームの規則になる。原子にもどるのは偶然(蓋然計算の法則にしたがう。本質的な新しさとして)。偶然は絶対的必然とは結びつくべきではない。本当は現実の作用をもたない時間が宿命的な作用という錯覚をあたえうることを理解すべきである。(隣の原子が放射したのに、一原子が多数回も不活発であれば、この原子が活動する蓋然性がだんだんふえてくる。したがって休息は作用の蓋然性を増大させる。しかし実際に休息が作用を準備するのではない。持続は原因ではなく、機会というかたちではたらく。)

因果性の規則は持続する行動アクションにかんする幾何学用語より、行為アクトの計数法によってよく表現される。

しかし以上のようなことは本論考の問題外のことであり、主題は直観による解決にある。哲学と科学の基礎の上にさまざまな直観が積み上げられる。哲学的見地からの非連続的時間の直観は、もっとも多彩な物理学の領域において、非連続の命題を望む読者を援助する。

第二章 習慣の問題と不連続な時間

I

時間とは何かが生起する時間とし、その時間の意識は瞬間しかないと主張してきたループネルIIバシュユールは、も

ちろん存在の現在をそれだけで説明しえたとは思っていない。現在を支えているのは習慣 *habitude* だという主張を展開するのが第二章である。習慣を、たんに反復するだけの慣習 *routine* と新しい対応を柔軟におこなう真の習慣とに、区別することも考えられることになる。

「さきに示したように、一見すると習慣の問題は、われわれが展開した時間の命題から出発しては解決できないように思われる。確かにわれわれは過去が実際に存続 ペルシステンス することを否定した。新しい瞬間が現実的なものを保証するとき、過去は完全に死んでしまったということをわれわれは証明した。さてここで、ひとびとが習慣について一般的にもっている考えに合わせて、われわれは消え去った過去の残したこの遺産、すなわち可動的生成のもとにあって安定した形象 フイギュール を存在にわたる力を習慣 *habitude* にもどしやらざるをえないだろう。したがってわれわれは袋小路に入ってしまったと心配するひとがいるかもしれない。われわれはループネル氏に信頼してこの困難な領域にも彼に従っていくことにより、いかにして多産な哲学的直観の大道を発見できるかを見ることができよう」(p. 79)。

瞬間には現在の存在だけしかない。過去が存続する現在の瞬間というものはない。過去における現在の瞬間は完全に死んでしまったとバシユラールは断定したのである。一方習慣という新しい概念は、過去の残した何か、「可動的生成のもとにあって安定した形象を存在にわたる力」と定義されるが、いったいそれは瞬間の概念と両立するものであるか。まずバシユラールはあえてその矛盾をさらけだし、両立させる哲学的直観の正道を探ぐるのだと公言する。この章は前章よりもループネルの引用が多くなっているが、胚や遺伝のように生物学的分野の問題が移っていくことにもひとつの理由があると思われる。

バシユラールによればループネルはこの課題の特色を次のように指摘している。「いまわれわれのやるべきことは、空間と時間から取り上げた実在性を原子にわたえ、聖堂 シニグル のこれら二つの掠奪者から奪った戦利品をうまく利用すること

である」(『シロエ』p.127)(p.79-80)。

ループネルの考えでは空間も原子の属性であり、しかも原子の化学的、物理的属性と同列のものである。^(注1)

「実際、連続的空間に帰属する現実^{レアリテ}に対して向けられた(ループネルの)攻撃は、われわれが先ほどたどったような直接的連続とみなされる持続に帰属する現実に対する攻撃におとらず激烈である。ループネル氏にとって原子は空間的属性をもつが、それは原子が化学的属性をもつのとまったく同じ理由であり、また同じように間接的なのである。換言すれば、原子は現実の骨格となるような空間の一片をもつことで、それ自体を実体化 *substantifier* するのではなく、ただ、空間のなかにそれ自体をあらわす *sexposer* にすぎないのである。原子の生成が孤立した諸瞬間を組織^{オルガニゼ}だてるように、原子の見取図^{プラン}は分離した諸点を組織だてるにすぎない。存在の連帯の力を本当にもたらずのは、時間でもなければ空間でもない。かつてがいまに働きかけることがないと同様に、あそこはもはやここに働きかけない」(p.80)。

原子のレベルでの空間と時間は二次的な属性にすぎず、原子の「存在の連帯^{ソリダリテ}の力」はまったく別のところからくると考えられている。

このように、まずループネルの原子の存在についての特異な考えが紹介される。原子が空間に出現するのは、空間の实在性を示すのではなく、化学的な性質と同じレベルの間接的な性質なのだということである。あくまでも原子の活動によって時間や空間が組織だてられるにすぎず、原子と無関係に時間や空間は存在しない。そのことを理解するためには、あらかじめ空間のなかに原子の出現を實在化^{レアル}しないことが必要なのであり、原子の存在を第一義に考えることが要請^要されている。

「外側から見られた存在は孤立した瞬間と点によって二重に遮断されている。存在を内側から捉えようとすると、この二重の物理的孤立に、すでに見たように意識の孤立が加わる。ここでライブニッツ的な直観の強化を見ないわけには

いかない。ライブニッツは空間に配分された諸存在の直接的で能動的な連帯関係を否定した。それに対し、予定調和(説)は、普遍的で絶対な時間の作用によって実在化される真の連続性コンティニューイテが各モナドの中心にあり、あらゆるモナドの完璧な一致照応コンコルダンスがその時間の流れにそって示されると仮定した」(p. 81-82)。

この瞬間的存在を外側から眺めると、時間的にも空間的にも孤立した二重に遮断された瞬間一点であるけれども、これにさらに意識の孤立が加味される。ことわっておくけれども、この存在はもはや原子ではなく、実体のような根本的存在ということになるであろう。

バシュラールはライブニッツのモナドロジーとの対比をおこなう。存在間の連帯関係、影響関係の否定と、モナドの完璧な照応という予定調和による真の連続性の想定である。

モナドとは神の「創造によってしか生せず、絶滅によってしか滅びない」(河野与一訳、『单子論』、六、岩波文庫)ものであり、「自然の本当の原子」だといわれている。もちろんこの原子は、自然科学のいう原子でも、数学的な点でもない。前者はなお分割しうるものであるし、後者は不可分ではあるにしても非事象なので、自然には存在しないからである(同書、三)。瞬間という時間の存在を考えるにあたり、モナドを類推することは哲学史の上からは当然のことなのである。(注3)

『シロエ』のなかには補足的な否定、現在と過去の存在の直接的連帯の否定がある。しかし、ここでもまた、時間の瞬間のこの連帯は直接的ではなく、あたえられてもおらないとすれば、換言すれば、ある種の原理にしたがって群に集合された瞬間を直接的に結びつけるものが持続ではないとすれば、いったいこの非直接的で非時間的な連帯が、どのようにして存在の生成のなかに出現するかを示すことが何よりも必要である。要するに予定調和の仮説にとって代るための原理を見つけないならならぬ。私見によれば、習慣についてのループネルの命題が志向するのはこの方向である」

(p.81)。

しかも『シロエ』には非連続という直接的連帯を否定するライブニッツと共通する考えが認められるし、おそらく予定調和の仮説に相当するものは習慣なのである。「非直接的で非時間的な連帯」を可能にする原理をループネルは習慣という考え方のなかで示すことが要請されている、とバシュユールは問題を思想史のなかにもどして整理したのである。「したがってわれわれの課題は、直接的に有効なものととして、根拠もなく間違つて仮定された過去への依存から習慣を引き離れたときでさえも、いぜんとして習慣が構想可能である、ということを示明することである。次に今度は、孤立した瞬間の直観において定義されたこの習慣が、存在の恒常性と進歩を同時に説明するということを証明しなければならぬ。

しかしまず括弧をひとつはずしておこう」(p.81)。

しかしバシュユールがまず示すのは、逆の立場、過去の実在化の論理であり、過去の物質的な残存なのである。そしてさらに胚子の例を出す。これは現代の遺伝子生物学などにも共通するような一種の決定論をもちこむことになるであろう。すべてが遺伝子に登録されているとすれば、現在も未来もすべて過去において決定されていたことになるからである。

「われわれの立場が困難だとすれば、反対者の立場は逆におどろくほど容易である。たとえば、実在的思考、すべてをへ実在化する√思考にとつて、すべてはいかに単純であるか見ることにしよう。まず存在とは実体であり、実体は同時に定義のおかげで諸性質の支えであり生成の支えとなっている。過去は物質のなかに痕跡を残し、それゆえ現在のなかに反映をあたえ、したがって過去はつねに物質的に生きている。

胚子を例にとろう。未来は、^{アツニール}大脳の細胞が思い出を保存するのと同じほど容易に、物質的に準備されているかのよ

うに出現する。習慣にかんしては、習慣がすべてを説明するのだから、習慣を説明することなど無用である。習慣は以前の努力によって存在の意のままになるメカニズムであることを理解するためには、大脳が主動的図式 schemes motuels の貯蔵庫であるというだけで十分である。したがって習慣は過去と未来の連帯を組織するほどまでに存在から物質を區別する。実のところ、この實在論的心理学を説明する強力な語とはいったい何であろうか。それは登録、*inscription* ということ表現する語である。過去とか習慣が物質に登録されているとってしまえば、すべては説明され、もはや疑問は消えてなくなるのである」(p.81-82)。

胚子や遺伝子のなかに過去の体験がすべて登録されているとすれば、(すくなくとも生物学的な構造決定の情報と現在ならいのであろうか)、その登録の物質的なメカニズムを説明すればすむのである。もちろんバシユラールはこのような登録を認めることはできない。

「われわれの立場としてはもっときびしい要求をもたねばならない。登録はわれわれに何もかも説明しない。胚子が生命の諸形成の伝達においておこなうように、現在の瞬間が未来の諸瞬間の上に物質的な作用をおよぼすという主張に対し、われわれの反論をここでまず定式化しておこう」(p.82)。

現在の瞬間の自立を保持しつつ、過去の遺産を受けつぎながら、未来にはたらきかけることはどうすれば可能なのであろうか。

「ルーブネル氏の指摘するように、おそらくそれは八個体がこれから実現する約束をすべて生殖質にあたえたり、また存在の形態と機能をいざれ実現する習慣をまとめて遺産として生殖質のなかに置いたりすることは、まことに便宜的な言葉の用法√(『シロエ』p.34)である。しかしこれらの習慣の全体が生殖質にふくまれているとひとびとがいうとき、表現上の意味について、あるいはむしろ¹比喩²の価値について理解すべきである。生殖質を特質の全体が含まれて

いる容れものとして想像するほど危険なことはないからである。抽象的なものと具体的なものをこのように組合せることは不可能である。第一そんなことをしても何の説明にもならない」(p.83)。

いったいこの抽象的なものとは生殖質なのであろうか、それとも特質全体なのであろうか。この具体的なものとは生殖質という胚子の本体をさすとすれば、個体が将来実現すべき特質全体あるいは習慣の全体までもが抽象的なものとなるのであろう。

「この批判とロイレ氏の神秘思想分析(A. Koyré, *Bohème*, p. 131)において示された形而上学的反論を比較してみると興味深い。へけれどもわれわれは胚子エムブryoという概念がすべての有機体説のなかに、隠されて、あるいは直接に、表現されているということを力説したい。胚子という観念は実際にひとつの神秘である。それはいうなれば有機体的思考のすべての特質を集約している。それはもろもろの反対物の本当の結合、矛盾するものの結合ですらある。胚子とは、それではないところのものだ、とさえいえるだろう。すでにそれは、まだそれではないもの、ただそれがこれからなるものである。それは「今」それである。なぜなら、そうでなければ、それはいずれそれになることはできないであろう。それは「今」それではなければ、どうしていずれそれになることができるだろうか。胚子は進化する物質であり、同時に物質を進化させる能力でもある。胚子は自己自身にはたらしめかける。それは自己原因である。その存在の原因でなければ、すくなくともその発展の原因である。悟性ではこの概念を捉えることができないことは明らかであろう。生の有機的な循環は線的論理にとつては必然的に悪循環に変換する」(p.83-84)。

これはアレキサンデル・ロイレ「Alexandre Koyré, 1892-1964. フランスの哲学者。科学史家。『ヤコブ・ベーメの哲学』(1929)の他、『ニュートン研究』(1965)など多くの著書がある」のベーメ論における、ちょっとした論理の遊びともいえるべき個所である。

胚子はいつまでも胚子であっては生成はできない。胚子をAとし、生長したものをBとすれば、コイレのいうようにAはBとなるので、AはAではないとなる。一方、Aのなかに何かしらBの要素をもたずにBとなることはできないから、AはすでにBであり、そうだとすれば、あくまでAはAだともいえるのである。

バシュラールは悟性ではこの論理の把握は不可能であり、線の論理は悪循環になってしまうと考えている。この線の論理は、AはAであり、非Aではない、という基本的な自同律を出発点とする形式論である。

そこで胚子が進化する物質、あるいはもっと進んで、「物質を進化させる能力」をもつという別の考え方を導入せざるをえない。胚子は自己原因でありしかも発達の原因でもある大きな可能性をふくむ存在なのである。

「多くの矛盾のあるこの混乱の理由は、おそらく存在と生成、実在の瞬間と思考された持続、具体的なものとの構成されたもの、あるいはループネル氏にならってより適切な表現をするなら、具象と抽象とを、同時に捉えるはずの実体の二つの異なった定義を一緒にしてしまったという事実から生じるのである」(p.84)。

ここで並べられている対比は次のようになる。

| | |
|--------|---------|
| 存在 | 生成 |
| 実在の瞬間 | 思考された持続 |
| 具体的なもの | 構成されたもの |
| 具象 | 抽象 |

「もし生物の発生において——しかし規範的な計画というものが考えうる場合だが——未来の諸瞬間への現在の瞬間の作用を明快に理解するにいたらないなら、消去した時間の現実化をまかされた物質のなかに過去の混乱し混淆した無数の出来事の登録を仮定することは、どんなに慎重さを要することか」(p.84)。

要するに登録という概念は実証的に証明してから使用すべきだという一言につきるであろう。バシュラールは遺伝を否定するのではないが、もっと精密に考えてみようというのである。

「まず、いったい神経細胞はある出来事を登録し、他の出来事を登録しないのはなぜか。もっと精密にいうなら、規範的作用あるいは美的作用が存在しないのに、どのようにして習慣はひとつの規則やひとつの形式を保存できるのであろうか」(p.84)。

これはごく基本的な問いであろう。無数の経験のなかから、何を基準として記憶の選択がおこなわれるのだろうか。また習慣の形成にしても同じ問いが生じるであろう。

「実のところ、それはいつも同じ議論である。持続の信奉者は時間の作用をふやし引き伸ばさずにはいない。彼らは次々に続く作用の連続性と、他方では潜在的な状態にあって再生するために適切な瞬間をその持続(の流れ)にそって待っている作用の不連続との双方から利益を得ようとしている。彼らの考えによれば、習慣が強化されるのは持続されると同時に反復されるからである」(p.85)。

過去を実とする論議の曖昧さは、経験の選択的登録のメカニズムを説明しなければ消去できない。また持続説は、連続する作用のほかに、潜在的な状態で非連続的に作用するものを容認しているので、論理的な首尾一貫性を欠くことは明らかであろう。

「非連続な時間の支持者はむしろ豊饒な瞬間の新鮮さが習慣に柔軟性と有効性をあたえることによって感銘を受ける」(p.86)。

おそらくバシュラールのいう通りであろう。しかしまだ習慣そのものがどのように形成され、どういう作用をもつか、明瞭になったとはいえない。習慣がすでに形成され、つまり記憶に登録された何かは、持続説では連続と非連続

を容認しており、持続と反復によって強化されることになる。一方、瞬間説では、新しい瞬間が習慣に柔軟性と有効性をあたえる。なぜなら、新しさは習慣に慣例的対応とは別の対応をせまるからであり、新しさを内に取りこむことが必要だからである。

「時間の非連続説の支持者が習慣の作用とその^{ベルヌスジス}継続を説明しようとするのは、とくに習慣の攻撃による。それはちょうど（弦楽器において）次にくる音を決定する弓の^{アタック}タツチのようなものである」（p. 85）。

この比喩でいうなら新しさを前にした習慣は、弓のタツチのように示されている。演奏中のバイオリニストの弓が新しい音をうみだす瞬間は、すでに過去の音によって準備された音楽的時間のなかで、次にくる音をひきだす一種の決断を要する瞬間である。しかし習慣とはこのバイオリニストにおいてすでにその曲を何度も練習し、演奏の下地が整備されていることも意味しうるであろう。そのような反復をバシユラールは慣例 routine として区別し、ある種の飛躍や変化をとともなう習慣をその上位に位置づけようとしていることがうかがえる。

そのあとでバシユラールは次のように述べる。

「習慣がエネルギーを利用できるのは、エネルギーがある独自のリズムにしたがって点々と並んだ場合だけである。

おそらくループネルの定式へエネルギーとは大きな記憶にすぎない（『シロエ』p. 10）を解釈できるのはこの意味であろう。実際にエネルギーは記憶によってのみ利用可能であり、それはひとつのリズムの記憶なのである」（p. 85）^(註 3)。

このエネルギーとは、ループネルによれば物質とともに宇宙の二大構成要素なのであるが、記憶によってつくられている。とすれば、この記憶とは宇宙を動かす大きなシステムをさすとも考えられる。ループネルにとってこの記憶はどのような原理だとすれば、習慣とはその記憶の発現となるのであるか。エネルギーが利用されるのは、つまりこのシステムの制御するリズムにしたがう場合だということになるであろう。それともいまだそのリズムが規則や法則として対

象化される以前の運動状態をさすのであろうか。

「習慣とはつねにその新しさの中で復原レストレイトされた行為アクトである」(p.85)という定義も、あるいは「新しさを慣例 routine により同化」することという定義も、やはり再現のレベルでの考察の結果である。つまり、ここではへなせゝ習慣が形成されるかという原因や目的の究明は問題とならず、いかにして習慣は瞬間という考え方と両立しうるか、という次元に移っていることに注意しなければならない。

「われわれにとって習慣はしたがってつねに新しく復原された行為アクトである。この行為の結果と発展はより下の次元の諸習慣に引き渡される。この下位の習慣はおそらく豊かさの点では劣るが、それらを支配する最初の行為にしたがいつつもやはりそれらに独自のエネルギーを消費する。S・バター「Butler, Samuel, 1835-1902. イギリスの小説家、思想家」もすでに指摘したように、記憶は対立する質の二つの力、へ新しいものの力と慣例ハビトゥスの力、つまりわれわれにとってもともなじみが少ない事象かあるいはもつとも身近かな事象かによって影響されている。(『生活と習慣』ラルボー仏訳, 1922, p. 149)。われわれの考えでは、この二つの力に直面すると、存在は弁証法的というよりも総合的に反応するので、むしろ習慣とは新しさを慣例的に同化 assimilation routiere するというふうにしたいくらいである。しかしこの慣例という概念で、下次的な機械化を導入することはほしくない。循環論と非難されることになるからである」(p.88-89)。

ここでバシュアールのためらいを指摘することは容易である。しかし事物の属性や特性を記憶というふうに一括してしまえるなら、その発現である習慣を、まったく自動的な慣例と、ある自主的、主体的な判断をとまなうへ総合的ゝな習慣とを区別しても、循環論をさける根本的な解決にはならないであろう。なぜなら瞬間派の主張からすれば、瞬間はつねに新しさをともなうのであり、過去の否定として出現するのだから、たんなる反復としての慣例はなりたたないからである。

「いや。ここで視点の相対性の問題が介入する。慣例という領域に検討の目を移すやいなや、その問題がもっと活発な知的習慣同様に瞬間の根本的な新しさによって供給された躍動の利益を受けていることに気づくであろう。上下に階層づけられた習慣のはたらきを検討してみたまえ。ひとつの能力エプテイチエードはそれ自体を超克しようと努力する場合しか、つまりそれが進歩するときしか能力ではないことがわかるだろう。」(p. 86)。

ここでバシュニールのモラル、「ひとりの人間が人間であるのは、超人になる割合に依じてである」(『水と夢』)を思い出しても場ちがいではあるまい。すでにその考えはこのように世界観の根底において形成され、進歩発展の基軸として位置づけられていたのである。瞬間が新しい現在であるとすれば、過去はたえず否定され、そのつど能力もまた自己を超克し、新しさを同化する努力を要請されていることに、彼のモラルは直結していたのである。

「もしピアニストが昨日よりも今日良く演奏しようと思わなければ、彼は曖昧な習慣におちこんでいる。もし仕事に身が入らないなら、やがて彼の指は鍵盤の上を走る習慣を失うであろう。まさしくたましいが手に命令している。習慣を本質で捉えるためには、その生長段階で捉えねばならない。このように習慣とは、成功を増加させることによって新しさと慣習を総合することであり、そしてこの総合は豊かな瞬間によって実現されるのである (cf. バトラー、前掲書①, 150, 151) 」(p. 86-87)。

このように毎日精進するピアニストの例こそ、習慣が創造につらなる好例である。反復のなかに創造の要素があり、反復が新しさをうみだすことをもっと精密に分析するならば、練習はたんなる繰返しとしての反復とはなりえず、たえずそのつど新しい工夫が要請され、一見単調な反復のなかにも創造があることが見えてくるであろう。

「したがって、偉大な創造、たとえばひとつの生物の創造は、出発点において、誓約アオワをもった新しさを受けいれるにふさわしいいわば新鮮な物質マツエールを要求するのだということがわかる。バトラーのペンからは次のようなことが生じる。

へいったい生命の始まりとみなすべきような多くの誓約を物質のもっとも小さな部分がどのようにして取りこむことができたか、ということの説明し、あるいは、この誓約がどんなものからなりたっているかを決定しようとすることは不可能なことであり、せいぜいいえることは、この誓約があらゆる事物の本質自体の一部をなすこと、しかもこの誓約は何物の上にもものっていないということである」(バトラー前掲書、p.128)(p.87)。

バトラーのいうこの誓約とはおそらくループネルの構想する記憶の鍵に類似した考えではあるまいか。胚子や遺伝子が伝達する必然的構造が、必然的な反復のなかに、いわば偶然的な側面をすでに宿しているのであり、最近の用語でいえばゆらぎをもっているということである。バトラーはしかもそれが物質的な基盤をもたないと考えるため、 \wedge 誓約 \vee というような表現をもちいざるをえなかったのであろう。つまり物質的な基盤をあたえるなら、それはここで仮定されたような予想外の事態に対応できる構造をもたねばならず、そうした柔軟な構造を物質として想定することができなかつたからであらう。

「誓約はすべてであると思われる。なぜならそれは瞬間群の総合の次元ではたらくからであり、しかし、瞬間の現実を超越しようとするゆえに実体としては何も、ないからである」(p.87)。

このように誓約をバシユラルは説明している。物質や実体としては存在をもたないが、しかし瞬間の集合を総合する作用をもつものが誓約として物質の本質の一部として入っているというのである。この誓約はまさに生命の神秘そのものの精髓ということができよう。

「ここでもまた誓約は期待であり新しさである。生における誓約以上に伝統的要素の少ないものはない。新しさに酔いしれて生にささげられる存在をまさに未来への約束としてとるようになっていく」(p.87)。

バシユラルは進化発展の鍵をこのように自己革新という誓約に求めるのであり、過去を革新する現在の瞬間は未来

を当然約束するであろう。しかしここで背後にライプニッツ流の予定調和を必要としないのであろうか。

「力のうちもっとも大きな力は素朴な力である。まさしくループネル氏は、生がそこから生じる胚芽のやどる *re-cueillement*「精神集中、瞑想」の状態を大切だと力説した。それは絶対的開始において肯定された自由についてすべてのものをふくんでいたのである。胚芽とはおそらく、ある側面では模倣する存在であり、再開する存在であるが、初登場の充実状態においてしか本当に再開できないものである。開始すること、それが胚芽の真の作用である。△胚芽は生殖細胞の出発以外の何ももたらさない（『シロエ』p.33）。換言すれば、胚芽は生きる習慣の開始である（p.87-88）。バシュラールはどちらかといえば物理学や化学を得意とし、生物学についてはあまり発言していないが、この進化の問題について無関心ではなかったし、当時の進化をめぐる論議についても興味をもって見守っていたと思われる。

「もしひとびとが、ひとつの種 ^{エスベース} の増殖にひとつの連続を読むとすれば、それはひとびとの読み方が粗雑だからである。当然のことだが、ループネル氏は生物体の形体 ^{フォルム} の連続を保証するために提案された多かれ少なかれ物質主義的な原理をすべてしりぞける」（p.88）。

バシュラールは新しい独自の見解を提示するのではなく、ほとんどループネルの見方を祖述する。

「かれはいう。△われわれは胚子があたかも非連続の要素を構成しないというふう論じることでもできたかもしれない。われわれは生殖細胞にあたかもそれが数世代間存在していたかのように、数世代の量産をあたえた。しかし表象的微粒子の理論は現在のこの理論となんら対応するものではないということをはっきり述べておこう。生殖細胞のなかに過去の恒常的な受遺者 ^{レガデル} と生成の永遠の活動家であったものの要素を導入する必要はない。われわれが生殖細胞に託している役割を果たすためには、ネーゲリ Naegeli. [Karl Wilhelm von, 1817-1891. スイスの生物学者。]の *Micella* 「原形質の構造単位として想定されたもの」や、ダーウィンのゲミュールやド・フリースのパンゲンや、ヴァイスマン

〔Weisman, August, 1834—1914. ドイツの動物学者〕の胚原質も必要ではない。生殖細胞はただそれだけで十分であり、その現実の實質と現実のはたらきとその時間とで十分である。しかも生殖細胞は全体が同じ時間に生きそして死ぬ。それは独特の遺産やそれが集める遺産は現に生きている存在からしか受けとらない。その遺産がその細胞を情熱的配慮で作り上げたのであり、あたかもその細胞が生れた愛の炎がその機能的従属性をすべて棄てさり、原初的な力を回復し、その始めの貧しさをとりもどしたのだとでもいうようである（『シロエ』p.88）（p.88—89）。

ループネルの独自の考えは、胚子や生殖細胞にとくに遺伝のための特殊な物質を想定しないところにまず求められる。しかし胚子を構成する原子のレベルですでに△記憶▽が作用していることを想起するなら、胚子が△ただそれだけで十分▽ということの意味が明瞭になるであろう。だから胚子の△現実の實質と現実のはたらきとその時間▽さえあれば、記憶は十分にその作用を発揮するというのであろう。したがって胚子のなかに遺伝のための必要な作用はふくまれていくことになる。

過去と未来だけに配慮するあまり、ともすれば両者をつなぐ現在の瞬間を軽視する傾向に対し、胚子の現在における作用を重視し、△始めの貧しさ▽のなかで十分に機能していることを力説したのである。

「結局、生の連続性よりも、誕生の非連続を説明した方がよい。それによって人は存在の眞の力^{ヒュイサンス}を計ることができ。この力は、以下で見るように可能なものの自由へ回帰すること、存在の孤立から生じたあの無数の共鳴にもどることである。

しかしこの点は、いずれ非連続の時間のテーマをもちいて、習慣の形而上学的理論を發展させたときの方がおそらくもっと明快になるであろう」（p.89）。

ごく簡単に本節を要約しておこう。

まず習慣の定義とみなされるのは、「可動的生成のもとにあって、安定した形象を存在にわたえる力」という表現である。このような習慣が、過去や未来と断絶した現在の瞬間とどのように関係づけられるかが本節のテーマである。

ループネルによれば、空間も時間も原子の属性にすぎず、間接的、二次的な特性である。原子が生成するとき、諸瞬間を組織だて、また原子の見取図が空間の分離した諸点を組織だてるのである。

したがって存在の連帯の力はこのような時間、空間とはまったく別のものであり、過去が現在に、またあそこがここにはたつきかけるのではない。

ライプニッツのモナドと予定調和との類似が指摘され、予定調和の根本原理にあたるものが、ループネルにおいては記憶でありその発現が習慣だと思われる。それゆえ存在の非直接的で非時間的連帯を可能にする理論であることが要請される。

逆の立場つまり持続の実在論では、過去が物質へ登録されることが中心概念である。これは便宜的図式にすぎず、生殖質は存在の全特質を全部ふくませるような容器ではない。

コイレによれば、胚子に代表されるような生の有機的論理は線的論理においては悪循環になってしまふ。これは抽象と具象の混同から生じる。

胚子は「物質を進化させる能力」とせざるをえない。胚子は自己原因でかつ進化原因である。

△登録▽のメカニスムの問題点。持続説をとると、連続と非連続の両方を利用せざるをえない。むしろ非連続説を採用した方が一貫性がある。瞬間は習慣に柔軟性と有効性をあたえる。

バイオリンの弓が弦にあたる瞬間を例にとり、習慣の発現における攻撃性の分析。

ループネルによれば世界を物質とともに構成するエネルギーは「大きな記憶である」(ライプニッツの予定調和のよう

な根本システム)。

習慣とは、つねにその新しい状態で復原された行為である。バトラリーの説をふまえ、習慣を新しさの慣例的同化とみなす。ピアニストの反復練習を例に、反復に創造がふくまれることを示す。能力にしてもそれ自体を超越する、すなわち進歩するときにはじめて能力が発揮される。

生物の創造は△誓約▽をもつというバトラリーの説をふまえ、物質的基盤をもたず瞬間群を総合し、瞬間の現実を超越する問題を検討。

ループネルは胚子の *recueillement* の状態を重視している。また胚子には遺伝のための特別の物質を必要としない。ループネルによれば原子のレベルから記憶が作用しているので、胚子は胚子であることによって十分その機能をはたすのである。

(注1) 『シロエ』のこの引用の前ページには次のように述べられている。

「空間と時間は生命がそれらを活性化するところにしか存在しない。空間と時間は原子の属性であり、進展するものの属性、生の属性である。原子の外部においては空間も持続も存在しない。空間と時間は実際に存在しないときにのみ無限なようにわれわれには見えるのである」(p.126)。

(注2) 「各原子が、宇宙がその全存在とともに、こうしてたえず自己を革新する、しかもそれぞれがみずからの永遠の行動についてもつ独自の習慣によってそうするのである。このような力動的な記憶メモリーによって、生命だけではなく、われわれが物質マターとよぶもの、エネルギーとよぶものもつくられる。エネルギーとは大きな記憶メモリーにすぎない。秩序ある運動体系と力動的調和を発展させる指導的なたましいがつくられるのも、ただ記憶によるのである。各原子はこの運動と調和によって宇宙の均衡を形成する」(『シロエ』(p.10-11))。

(注3)

なお次に引用されるライプニッツのモナドロジーにおいては、時間と空間も現象の秩序として考えられている。

「ライプニッツによれば合成的実体は真の実体ではなく現象である。空間は時間と共にその現象の秩序たるに止まる」
(河野与一『单子論』訳注。岩波文庫、p.213)。